

たがって、「ヨーロッパ」史の脱構築がまず必要である。はじめから「ヨーロッパ」とその歴史があったと考えず、いわゆる「イスラーム世界」の歴史も含めてユーラシア西方地域の過去に起こった諸事象を丁寧に解きはぐしパーツにばらして、全体を新しい世界史の視点からもう一度解釈し組み立て直してみればどうだろう。「中華」という概念に基づいて構想された中国史についても同様の手続が必要である。これまでの国、文明ごとの歴史研究の成果を「一体の世界」の歴史という観点から見直せば、そこに浮かび上がる過去の解釈と叙述は、これまでの世界史とは相当異なったものとなるはずである。

二〇〇八年度

史学研究会大会・総会の記録

史学研究会の二〇〇八年度大会・総会は、一月二日（日）一三時から一七時まで、京都大学文学部新館において開催された。総会では、藤井譲治理事長による挨拶の後、横山良氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告がなされた。

庶務（中砂明徳常務理事）からは、役員交代、今年度の例会実施、会員数・史料送付数の動向などについて報告があった。また、来年四月十八日（土）の例会開催（テーマ「戦争」）が案内された。

編集（南川高志常務理事）からは、「史林」が順調に刊行されていること、委員の増員・副査制度の整備など編集体制の強化を図っていること、本年四月に開催された「環境」をテーマとした例会の発表と討論が第九十二巻一号の特集号にまとめられる予定であることが報告された。

会計（泉拓良常務理事）からは、二〇〇八年度予算、会費滞納者の退会規定作成の準備、東京堂への委託販売の実績、振込み用紙の封入を来年度から年二回（三月刊行の二号、一月刊行の六号）とすることが報告された。

これに引きつづき、公開講演が行なわれた。講演は次の二本であった。

上原 真人氏

「歴史情報源としてみた瓦」

羽田 正氏

「イスラーム世界と新しい世界史」

講演者紹介と司会は、それぞれ泉拓良理事

と濱田正美理事がつとめた。講演内容は本号に掲載されているが、ともに熱のこもった報告であり、日曜日であるにもかかわらず一〇四名の聴講を得ることができた。

公開講演ののち、吉本道雅理事が閉会の辞を述べた。大会終了後、オーブンな立食形式の懇親会が開かれた。

なお、総会と大会に先立って開催された秋期理事・評議員会において、庶務・編集・会計・広報の各常務理事から会務報告があったほか、次の八名が編集委員に加わることが了承された。

吉川真司、吉本道雅、濱田正美、小山哲、上原真人、永井和、杉本淑彦、米家泰作（文責 中砂明徳）

『史林』投稿規定

（二〇〇八年二月改定）

◇資格 本会会員であること。

◇投稿受付原稿の種類、長さ

論説 1段組54字×19行の体裁で、

三二〇〇字以内

研究ノート 2段組29字×20行の体裁で、

二〇〇〇字以内

研究動向 2段組29字×20行の体裁で、